

飲める水を生食文化

～旅の歴史と未来～

旅の文化研究所所長 神崎 宣武

今までのお三方のプレゼンテーションは、アクアツーリズムの未来へ向かって非常に手がかりのある重要なお話でありました。私はそれに、少し水を差すような話をしたいと思います。

今までの話は、表流水をどのように考えるかが中心でありました。私たちの水は、表流水が一方にあり、もう一方に地下水があります。この地下水の問題にも触れておかなければいけないと思います。

ご承知のように、砂漠のオアシスを取り上げるまでもなく、人は水があるところへ集まります。その水は、表流水も大事で、工業や運搬が発達するとさらに大事な要素になります。しかし古く遡ると地下水が大事になります。地下水は、装置とすれば井戸と湧き水ですが、今日は井戸と言うことにいたしますが、井戸が掘れる場所、井戸の水が汲み取れる場所です。そういう場所を、人間はどうしても必要とするのです。

表流水は勿論、飲用に使う、食用に使う習慣が世界各地にあります。しかしこれは、その地域に人口が少ないことが前提です。ある一定の人口が流域に住むようになりますと、表流水は飲用、食用には適してはおりません。ご存知のように、汚染による疫病の伝染が怖いからです。

特に都市はそのリスクを負わざるを得ないところがあります。飲用水あるいは食用水に使わなくとも、表流水から伝染病は発生します。それをどう防ぐかは、洪水を防ぐことと同じように、都市において大きな問題になっています。

都市も時代を経て、段々そういうことへのリスクが少なくなって参りました。ですから極端な例として、1000年遡った都市を取り上げて考えてみることにいたしましょう。

京都の地下水利用と都市祭礼

日本では京都であります。京都以外に、日本では1000年以上の歴史を持つ都市はないと言ってもいいかと思います。都市をどう定義するかの問題もありますが、少なくとも、かなりの規模を持って1000年継続する都市は、日本においては京都だけあります。この京都で、表流水をどのように恐れ、勿論一方でありがたがり、その表流水に対する意識を共有したか。それは八坂神社へお参りになれば、よくわかると思います。八坂神社は、今スサノオノミコを祀っております。明治時代、日本の歴史はかなりのフィクションがございました。その大きなフィクションが神仏判然令。明治初年、国の公事的な宗教を神道、仏教のどちらに決めるかというところでした。ほとんどサイコロを投げるような状態で、審議もせず、一夜にして決めたも同然のまま、神道を国の公事的な宗教といたしました。私達はしばしば国家神道と言うのですが、国家神道という文字はございません。これは後の学者が言っているだけのことです。公事的な神道。従って私事的な仏教は、「わたくしごと」で稼ぐしかないので、戒名料を高くということも、致し方ないのでございます。国からの補助金がありませんからね。よって、私達は明治における歴史のやりとりをもう1回見直さなければいけません。

スサノオノミコは、それ以前の神名牒にも書いてありますが、元々は主祭神ではない、柱として祀

る神様ではありませんでした。それが明治になると公事的な神道、それも大社、大きな格の八坂神社では、古事記・日本書紀に載っている神様を立てるよりなく、そこでスサノオノミコトが出て来たのです。八坂神社の主祭神は、古く遡ると牛頭天王であります。牛頭天王というのは、中国から入った信仰です。日本では八坂神社にお参りになると、その手前に牛頭社があります。よくご覧になるとわかりますが、あばたづらの神像です。つまり「疱瘡」、疫病・伝染病の守護神であります。京都では表流水を主に伝わって、疫病が生じました。その象徴が天然痘です。その他、消化器系の疫病があり、これが赤痢、チフス、コレラの類であります。

そういうものが都市に住むのは、避けなければならぬけれども、避けざるを得ない、避けることもできない1つのリスクでした。そこでかつて薬学、医学が未発達な時代は神頼みをするしかなく、八坂神社は疫病封じの守護神、それを京都全体で祀るところでありました。

今でも八坂神社の祭礼は7月です。真夏、町衆は7月1ヶ月をほぼ費やして、祭りを行います。日本の祭りは秋祭り、収穫の祭りが中心だと思われがちですが、これは農村、農山漁村の祭りの形態です。こちらは当然、田植えで豊作を祈念する春祭り、収穫で豊作を感謝する秋祭りが中心になる訳です。先程言いました口実的な神道になってからは、宮中の儀礼である新嘗祭が地方にも掛かり、秋祭りが大きく行事化します。けれど、農民の本来の祈願は春にあります。これから作物がどのように育つか。収穫がどのように得られるかを祈る。その切実さは春の方が大きい訳です。

それはともかく、都市に限っては夏の祭りが重要です。京都の祇園祭、祇園の系統は福岡や広島にもありますが、そういう都市の祭りは夏であります。もうおわかりでしょう。疫病、伝染病の恐ろしさは夏にあるのです。従って、疫病封じの祈願をする大きな祭りは、夏に行われます。その点で、私達は都市の暮らしと農山漁村の暮らしを区別して考えなくてはなりません。

しかし京都は、決して鴨川や宇治川の流れを飲用水に、あるいは食用水に使ってはおりません。京都は井戸の町です。我々は今日ではなかなか中を見る訳にいきませんが、京都の町屋はほとんど井戸を持っています。逆に言えば、京都は井戸の水があったから、あれだけの町であり続けたのです。つまり地下にある程度の高山層を経由してろ過された水が、プールされている。地下へ潜って調べた訳ではありませんが、さも学説のように、そう伝わっております。京都の地下には琵琶湖に相当するプールがある。多分そうでありましょう。あれだけの戸数が井戸水を使って、枯れることがないので。京都の町が1000年以上も持続している最大の理由は、私は地下水が十分にあったからだと思っております。

京都だけではございません。日本全体で、地下水は豊富です。これは急峻な山地をもっているからです。日本は島国といいますが、これだけ乱開発が問題になっても、未だに60%以上が山林であります。

一方で放置している山林が問題になりますけれども、山林面積がこれだけ熱帯雨林を除いて確保されている国は珍しい。それがやはり、地下水をプールする大きな要因になるだろうことは、見当外れではない筈です。

井戸水と和食の発達

この京都の地下水は軟水か硬水か。私はこれが世間で言われるほど大きな問題とは思いませんが、これは軟水です。そして軟水は料理に適していると言われます。京都でだしの文化がこれほど発達したのも、これが要因だろうという学説も根強くあります。

この京都の水、井戸の水があればこそ、和食が発達するのです。和食というものは、各国の料理と比較すればおわかりになると思いますが、水をふんだんに使います。いい例が、刺身です。刺身はいい水で洗わないと、魚の食味は落ちます。さらに言えば、O-157 が怖い状態になります。ですから、適度な有機質と旨さがあるのです。これは、地中深くに年数を経てプールされた水が前提になります。私は昭和 50 年代に、京都の料理人の世界を色々訪ね歩いたことがあります。ほとんどの料理人が京都料理は井戸の水で魚を洗わないと出来ない。野菜も井戸の水で浸して洗わないと京野菜は活きないと言っておりました。実はこれは信じまいとして聞けば、いい加減な話です。本当は水道水を使っています。しかし、私は経験率を数字以上に信じてもいいと思っていますので、素直に聞きました。

京都の水利用

1000 年の都、京都。これは外部からの人を迎える京都でもありました。つまり観光客を迎える観光都市でもありました。観光の大衆化は、水の安全が保障されない限りありえない訳です。今日は水をどう活かすかが大きな問題となっておりますが、水をどう飲むか、どう食べるかも、観光を促進する一方の大きな要素になります。

京都が 1000 年の観光都市であったのは井戸水が潤沢に確保できたからだ、私はほぼ言い切れるのではないかと考えております。

京都が日本でもいち早く水道を作りました。明治 27~28 年の疫病の流行がその原因です。明治 27~28 年といえば、皆様歴史年表のうえで見当づけなさるでしょう。日清・日露戦争の時です。今のように科学的な数値のデータがないので、新しい疫病が中国やロシアから来たとは言えません。しかし海外へ出兵した兵隊さん達が持って来たことは、幾つかの記録ではほぼ見当がつかます。

当時の日本の国は、港に疫病検査所を設置しておりました。その中で、大阪で引っ掛かるのが赤痢であります。呉で引っ掛かるのが、コレラであります。日清・日露戦争の時には、各地で疫病がそれまでとは別な流行を見せました。京都では特に、赤痢がまん延しました。そこで京都の市役所は、様々な方策・対策を講じます。被病舎、疫病病院であります。そういうものを本格的に作るのも、それからであります。その辺りのいきさつは、岡山大学の小野義郎先生が、「水の環境史」という優れた書物の中で書かれております。

28 年くらいから京都の対策が講じられ、32 年くらいに水道を引くことが京都市内の大きな事業として出て参ります。上水か下水かの議論も相当なされたようではありますが、結果的には上水を優先し、京都で水道が生じました。

しかし、京都の人達は水道料を払ってまで、水道を使った訳ではありません。井戸の水がありますから、井戸の水を飲む。洗濯に使う。風呂に使う。これで十分それまで来た訳ですから、新たに水道にお金を払ってまで使わない。よって小野さんの本によれば、京都では明治期で既に 40% くらいの

家庭に水道が引かれる準備がされていたにも関わらず、実用ではなかった。

しかし各家庭では、水道を必要な時に使ったのです。それは何で決めたかという、金魚を飼ったことでもあります。金魚鉢に井戸水を入れて金魚を飼う。そして井戸水を代える。金魚の体調が悪くなって浮かぶ。その時「ああ、水道の水でも使おうか」と考える。これもまた小野さんの書かれたことも孫引きであります。

水道の普及とペットボトルの登場

こうして水道が都市で出て参りますが、実用化されるのは戦後であります。これはご年配の方のご体験になるかと思えます。私の郷里は岡山県の田舎ですが、私の時代、中学生までは水道はございませんでした。井戸水であり、湧き水を共有したところから天秤棒で担いで来た。そんな歴史を持っております。そして、台所ではそれを水瓶に貯めておりました。

水瓶に水を貯めるというのは、必ずしも不潔ではなく、陶器の土のろ過作用がありました。滲み出ること、中の水温が一定の温度に保たれる。つまり気化熱による冷却という雑菌の繁殖を防ぐ効果がありました。これはもともとだろうと思えます。

東南アジアに行きますと、素焼きの水つぼを家庭に置いております。これを何段にも重ねております。私はインドでも当時のビルマでもそういう水を飲んで来ましたが、一番下の水が綺麗なんです。つまり素焼きの土器をゆっくりとろ過しながら水滴として落ちた下の段がいい水ということです。水の使い方、飲用水の使い方というのは、様々に工夫をした歴史があります。

戦後、水道水が歴史上では急速な普及をいたしました。かなりの短期間に普及をいたしました。昭和 40 年代の水道水は美味しくないと言ってきた筈です。カルキ臭があつて美味しくない。塩素による弱殺菌をしますから、当然そういうものが出て来るのです。その時にどうしたかと言いますと、煮沸消毒もありますが、やはり井戸水が水道水に対してはまだ優位でありました。

この井戸水が水道水と逆転をするのが高度成長期であろうと思えます。これは、同じ水源の水道を工業用水に使うことになった。その影響も大きいと思えます。私達は、水道水が匂いが薄く、飲み易くなったと思っておりますが、これは飲料水として改良されたものではありません。例えば化学繊維の会社、そういう場所では、水道水の微妙な化学反応が製品に影響します。そうした工業生産の側からの要求が強かった訳であります。

そういう訳で、水道水の改善が進みました。私達は、水道水を平気で飲むようになりました。

しかし京都では水道水を頼らず、井戸水が未だに出て参ります。大阪万博の後、京都でもどんどん大きなホテルが出て来ました。そのホテルの幾つかが今でも残っておりますが、蛇口に「これは飲用に適した水です」と書いております。「このホテルの井戸から汲み上げた水です。安心してお飲みください」ということです。京都の人たちにとっての井戸水は、なおも大きな大きな支え、誇りになっている。それに対し、井戸水を同じように持っていた筈の私達は、井戸水への注目をほとんど忘れてしまいました。これは、水道水が美味しくなった、あまり匂いが強くなった、下味が強くなったと同時に、ペットボトルが出たからであります。ペットボトルの水を、今我々は大変便利に使っております。井戸水の 2000 倍の金を払って買っているのです。

石森さんが仰ったこれからのグリーン・ツーリズム、あるいは陣内さんが仰ったエコ・ツーリズム。無

駄を省いて少しゆっくり、もとへ戻ってもいいじゃないか、ということですね。私はこれは、ペットボトルを捨てる事が出来るかどうかにあると思います。たかだか 40~50 年の歴史の中で、私達はいかに水に毒されたか。

ペットボトルは便利ではありますが、私はやはり、ある程度の規制をしないとイケないと思います。我々の井戸水、水道水を蒸発させたその冷やし水とどれだけ違うか。恐ろしく無知な若い人たちは、ペットボトルの天然水はほとんど汲み上げた地下水だと思いいなっていますが、それは違います。そんな水は日本では売れません。それは規制の外にあります。何らかの熱処理、薬品処理はされていないと思いますが、未だにペットボトルの飲用水の構造は不明なところが、私達に届く情報ではあるような気がいたします。それで目の敵にするのではありませんが、少なくともペットボトルを全面信仰はしない方がいいと思います。数年前、私は大学院生何人かと沖縄を一緒に回ったことがあります。沖縄の民家では縁側に番茶というか山茶というか、そういう葉っぱを焦がしたものをヤカンで冷ましてそのまま置いておきます。黒砂糖も置いておきます。訪ねて行くと、おばあさんが「お茶を飲んで行きなさい」と人数分、勧めてくれました。するとある大学生が「いや、私は結構です」と答え、鞆からペットボトルを出して来て「これを持っていますから」と言いました。そういうことがこれからのアクアツアーリズムに好ましいことかどうかを、私は後で論議したいと思います。

江戸時代の暮らしと旅の文化

いずれにしても、そうした飲む水が日本の料理を作ってきた。先程陣内さんは、「美しい風景が、美味しいワインを作ると」仰いました。私達も、これだけ恵まれた地下水があるなかで、井沢元彦さんをして「日本人は水に無関心すぎる」「水と防衛に無関心すぎる」というように、ほとんど水にあたるということを心配しないで暮らして来た訳であります。そして、水にあたることをほとんど心配しないで旅をして来た。

日本の江戸時代は、世界に冠たる旅行大国と言われて来ました。こう言うと「そんなはずはない」「庶民は虐げられて汲々としている」と言われます。それは戦後の支配者、被支配者という二項対立の歴史を学んだからです。実際はそんなことはありません。年貢に汲々していたと言いましても、これは稲作税制であります。田んぼ 1 枚を持っていれば、年貢で、税制で済ませられたんです。それが六公四民や七公三民で記録上残る。公文書に残っているところで虐げられたといわれるのです。

しかし農民は農業専業者ではございません。日本の農民とは、半農半漁、半農半商、半農半工、半農半芸と言ったがごとく、半期の農業であります。これは日本の気候からしても稲作をはじめ、ほとんどの主要作物は、春から秋までが栽培期間だからです。これが農繁期です。農閑期に遊んでいる人はいませんので、そこで稼ぎに出る。それを農間稼ぎ、作間稼ぎと言いましたが、その頃の収入は藩によって違います。幕末になると、諸藩が糾合してそこへ年貢を掛けるようにもなりますが、少なくとも天保改革くらいまでは、江戸の庶民は作間稼ぎ、農間稼ぎは懐へ入っておりました。ですから古い村、田舎がおありの方はよくお調べになったらわかります。氏神様の神輿、旦那寺の梵鐘、鐘。年号をお調べになると、大体元禄から文化文政の間に整えられているのです。これは皆、氏子や檀家の出費です。年貢で汲々として娘を身売りしないといけないという概念があったら、とてもそれは成り立たない。農間稼ぎがあったからであります。

ちなみに今、大体8人掛けの神輿を一騎買うと1000万円は下りません。氏子数が今200万や300万で1000万の神輿を買うことが成り立つかどうか。それを思えば、江戸の経済は、私達が考えるほど一面的に汲々としていた訳ではありません。汲々としていたのは、表帳簿であります。本音と建前と言ったが如し。裏帳簿は皆持っていた。その裏帳簿が旅を盛んにしたのであります。

参勤交代という制度を幕府が各藩に強要しました。つまり、街道と宿場の整備は国家事業として優先しなければならなかったのですね。当時の世界で最も街道が快適に歩いて、定時から定時の間に宿場に到着して、物が食べられたという驚きは、ケンペル、フィッセル、シーボルトというオランダ商館に勤めた文官達が、オランダ将官に随行して江戸散歩した時の記録に書かれています。

「この国の人達は、誠に旅好きである。それは、この国の人々が旅を安心してすることと例の制度のおかげである」

例の制度というのは、参勤交代の制度です。江戸時代、伊勢参宮だけでも年間100万人でありますから、これは蝦夷と琉球を除いた日本の人口を1800万から2000万と想定すれば、現代の観光旅行の人的比に相当する、それ以上のものであることがわかります。しかも歩いて旅をしますから、飛行機代も鉄道代も掛かりませんが、宿泊日数の実費は掛かります。

このように、江戸時代を見直さなければいけない。農間稼ぎ、街道・宿場の整備が江戸時代の旅を大きく隆盛させた原因であります。私はそこへ1つ水の安全を加えたいと思います。水の安全がなければ、日本人はこれだけ旅をしなかった。その証拠に、海外旅行が解放された暫くの間、私達は外へ行ったら生水を飲むなど、かたく教えられて守ってきた訳であります。それが今、外へ行っても、生水にそう怖がらずに済むようになったのは、世界各国が上水道を発達とペットボトルのおかげだろうと思います。

このように、私は近代化を目の敵にはしません。それによって私達は安全な旅を享受する。より多くの人が享受する時代を迎えているのですから、幸せなことです。しかし井戸を掘って、その水の安全を確保して、人が来たら夏であれば、まずは真水を一杯出す。こうした文化、水道やペットボトルが出来てからの歴史より、はるか何百倍の歴史を経て醸成して来たこの文化を、私達は今後どう評価すればいいのか、ということの後議論に委ねまして、私の話を終わりたいと思います。

ありがとうございました。